



フランス文学研究室 NEWS

平成 25 年 3 月 8 日
創刊号

創刊の辞

この号の内容

- 1 創刊の辞
- 2 イベント報告
- 3 在学生数
- 4 卒業生進路
- 5 学部生の声
- 6 就職活動記
- 7 読書会紹介
- 8 留学生だより
- 9 一年を振り返って
- 10 インドのフランス語
- 11 編集後記
- 12 ホームページ紹介

数年前から案を温めてきた「フランス文学研究室ニュース」がついに刊行に至り、大変に嬉しい次第です。小規模である利点を生かした学部生、院生、スタッフの親密さが、フランス文学研究室の大きな特徴でもあり伝統でもあります。卒業・修了生を含んだ交流の場が必要であらうとずっと考えていました。とりあえずは暫定的なスタートですが、このささやかな試みが大きく発展していくことを祈っています。なお、編集は可能な限り学生に担っていただき、研究室のフレッシュな情報を毎号お届けするつもりです。
(教授 阿部宏)

イベント報告

- 2012年5月22日アントワヌ・コンパニオン先生講演会
「写真映りのよい詩人：ボードレールの現代性」
- 2012年7月19日ブリジット・プロスト先生講演会
「西洋演劇小史として」
- 2012年11月29日エリック・ファイ氏・堀江敏幸氏講演会
「現代に呼応するのは、いかなるジャンルか？」
- 2012年12月8日シンポジウム「無名時代・表現の獲得と揺らぎ」
- 2012年12月18日マティス・エンゲルベルツ先生講演会
「現代フランスにおける小説と映画」
- 2013年1月29日ネリー・ラベール先生講演会
「「字足らず」な文学のために：フランス語による短編形式の起源を巡って」
- 2013年3月2日フランス文学専修 就職講演会・卒業祝賀会
- 2013年3月18日ブリュノ・クレマン先生講演会
「ジャン＝ポール・サルトルにとってボードレールとフローベールとは本当は誰か？」

在学生数

博士後期課程	2名	学部4年	12名
博士前期課程	8名	学部3年	10名
		学部2年	6名
研究生	1名		
(在リール大学博士課程、日本政府給費留学生)			

平成 24 年度卒業生進路

就職	進学
二本松市役所	東北大学博士前期課程
東北電力	東北大学博士後期課程 2名
レナウン	
ニトリ	計9名

学部生の声

フランス文学専修2年の井出智也です。この研究室に入って1年がたちました。現在僕たちの学年は男子1人女子5人という周りからは羨ましがられるけど、僕としては悲しい人数構成になっています。入ったばかりの頃はどうなるかと思いましたが、新歓や花見、芋煮などのイベントを通じて先輩方や教授方とも仲良くさせてもらっています。先輩方も教授方も、みんな個性的でとても面白いです。また、研究室内のイベントや飲み会の時には、必ずと言ってもいいほどワインがあり、チーズがあるのもとても魅力的です。周りからは羨ましがられます。(たまにフランスかぶれとも言われますが…) 自分も、そこでよくワインを飲むことになって、ワインを好きになることができました。こんな感じで研究室の雰囲気は和やかで、とてもいいものだと思います。4月からは後輩も入って来ますが、夏からはフランスのリヨン第2大学への留学が決まっているので、今よりもっと研究室に顔を出して、短い間でも後輩とも仲良くなって、留学から帰ってきても覚えていてもらえるくらいにはしたいです。もちろん、留学を有意義なものにするために、勉強も今まで以上に頑張ります。これといって興味のある分野はまだ見つかっていないのですが、先輩方の構想発表を参考にしたり、講演会等にも積極的に参加したりして、いろいろ吸収できればなあと思います。これからもこの研究室で密度の濃い学生生活を送っていけるように頑張ります。
(学部2年 井出智也)

フランスのねこのはなし



就職活動記

東北大学文学部は例年、公務員を目指す人と大学院へ進学する人が非常に多いようです。これは国立大文系の進路として珍しくありませんが、東北大学の傾向はより顕著に表れています。私の就職活動は民間企業一本に絞っていましたが、そのためどうしても情報は制限されがち、周囲に同じ進路を志す人も少なく常に不安と闘う毎日でした。この就職活動記が民間就職を考える人へのささやかな手助けになればと思います。

就職活動に本腰を入れ始めたのは3年の秋です。生協主催の民間企業向け就活講座に参加し、業界研究から面接の作法まで基本的なことを教わりました。特に面接対策の時間は私の甘ったれた根性を叩き直してくれたように感じます。他人というのは人の弱点を狡猾に突いてくるもので、思わぬところから斬りつけてくるのですが、相手から見た自分を知るにはこれが一番です。早い段階でも面接練習はととても有意義でした。

このころ漠然と興味を抱いていたのは出版・広告業界です。しかし年が明けるころになって、自分が一生勤めていけるかどうかを真剣に考えたときその魅力は急速に色褪せました。憧れだけで仕事は選べないと悟ったのかもしれない。その後志望を変え、鉄道、ガス、電力といったインフラ業界にエントリーを開始しました。自分の個性を活かすことよりも、相手のためお客様のことを考え、そうしてできれば社会に大きく貢献したいと殊勝な心が不思議に湧きおこり、また本心にはじめて気づいた瞬間でした。

目標が定まったのもあってか、選考は順調に進んでいき4月の早い時点で内々定通知を受けました。事前の企業研究や面接準備は極めて不十分でしたが、そのぶん自分が考えていることをありのままのびのび話せたように思います。面接は録音テープの再生会場ではなく、臨機応変さがもっとも評価される場面です。面接官との対話を心がけ、身勝手な独り芝居にならぬよう十分気をつけてください。

ご存じのように、電力会社は岐路に立たされています。とりわけ原子力発電の是非と代替エネルギーの導入は喫緊の課題です。新入社員として私がどれだけのことをできるかは分かりません。むしろその役割は小さいかもしれませんが、自分が今できることを見据えひとつずつ確実に成し遂げていこうと思います。

(学部4年 渋谷祐介)

読書会：この読書会は、学部生が文学研究と発表の方法に慣れることを目的としています。ペースは月2回。毎回、ひとつの仏語テキストを取り上げ、参加者がそれについて発表を行う形で進めています。多くの意欲的な学生のご参加を頂き、大変嬉しい限りです。読書会の後には、懇親会を開いています。来年度も継続できればと考えています。(主催者 白石)

- 2012年11月30日 初回ガイダンス 『ブラック・ジャック』
- 2012年12月14日 ユゴー 『静観詩集』
- 2013年1月18日 デカルト 『方法序説』
- 2013年2月8日 セナンクール 『オーベルマン』

読書会紹介

第四回読書会とその後の懇親コンパ印象記

2013年2月8日、東北大学文学部811教室において修士の学生2名を中心とする第4回の学生主催の読書会があった。出席者は修士3名、学部学生7名である。この回は、デカルトとセナンクール『オーベルマン』を扱った。

この読書会は学生主催である。出席者全員が前向きで、より一層深い議論に参加しようという積極的な意気込みが感じられ、この点通常の授業風景とはいささか違った雰囲気があるとの印象を、小生はうけている。

読書会后、研究室での懇親コンパが6時過ぎから、学部生の幹事を中心に、つぎつぎとあらわれた参加者とともに準備され、先生の乾杯ではじまった。フランスからの留学生も参加し、総勢20名以上となった。いつものビール、ワインなどの飲み物、お菓子、くだもの、そして今回の特別メニューとして、香り豊かにこの場で焼かれたクレープ、さらにこの場で焼かれたタイ焼きまでふるまわれた。各学年相互の一人一人との交流、学問的交流、国際交流、いろいろな日常の意見交換など、和気あいあいと、笑い声、話声、と、楽しくまたとてもにぎやかなひとときでした。小生は宴たけなわのころ早くに退出しましたが、その後はどうだったのでしょうか。どなたか加筆をお願いできませんか。

(修士1年 長尾貞紀・退職後の社会人入学生)

留学生だより (フランス・ストラスブール大学)

わたしは2012年9月から2013年6月末にかけて、交換留学生としてストラスブール大学の文学部に留学しています。

8月末にストラスブールに着き、大聖堂を見に行っても束の間で、9、10月の間は手続きのためにあちこちへと走り回っていました。日本の事務とは違い、窓口は午後しか受け付けなかったり、証明書の発行を頼むとその場でタイプしたものを渡されたり、学生証が10月になって発行されたりすると、文化や習慣というものを強く感じました。授業では、ほとんどの学生が非常に熱心にノートを取り、大教室での講義でも先生の話の遮って質問や反論をする学生がいるのに驚きました。先生方は分からなかったら質問するように言ってくれますが、専門的な内容を理解する以前に話すスピードが速く最初はかなり困りました。それでも貸してもらったノートを見直したり、毎日ラジオを聞いてから行ったり、フランス人の友達とお互いの母語を教え合ったりして授業についていこうとしています。



ストラスブール大学近くの教会 ▶

◀ クレベール広場のツリーの飾り



また、初めての留学は初めての寮暮らしでもありました。5つの建物に1000人以上の学生が暮らしています。留学生は寮に優先的に入れるので、多くが世界中からやってきた学生、年齢も国籍も勉強している分野も様々です。わたしは共同キッチンのある部屋のタイプで、寒い冬には気軽に友達と鍋パーティーを開いたり、たまたま会った人と料理を交換したりするのが、ここでの生活の醍醐味です。寮は大学近くにあり、通りを渡るとすぐにキャンパスへ行けます。ここで農業組合によるデモがあったときには、道路中でキャベツや車のタイヤが大量に燃やされているという衝撃的な光景が見られました。

留学している間は1日1日が濃くてあっという間に過ぎていきましたが、なぜか急かされているような感覚がありませんでした。図書館もスーパーもみな閉まっている日曜日やヴァカンス中に、ゆっくり起きて何も持たずに散歩に行くなど、日常生活の一コマを味わうことを学んだ気がします。

(学部4年 武藤奈月)

一年を振り返って

「できることがあるかもしれない」

この1年は怒涛のように過ぎていった。やや忙しい日程を組みすぎたのかもしれない。それでも、いまは少し風いので、それを振り返ってみることにした。

平成23年9月より、リヨンへ留学していた。留学は自分にとって貴重な経験となった。たくさんの思い出もできた。そのため今年度の前半はフランスにいて、研究室の様子は、先生や友人の誰かとときどき交わすメールで知る程度であった。

帰国したのが平成24年8月、研究室も仙台も日本も大きく変わっていた。研究室では、今まであまり顔を見なかった後輩が毎日やってきて勉強するようになっていた。仙台の街並みも、閉店していたお店が復興していたり、そのままどこかへ消えてしまって、新しいお店が変わっていたりした。日本全体では、西野カナ、SKB48、きゃりーぱみゅぱみゅといった知らない女の子達が活躍するようになっていた。たった1年で、ずいぶん変わった。

周りの変化に比べたら、自分自身は大して変わっていないような気がする。せいぜい、留学最後の貧乏旅行で、放ったらかしの髪が伸び放題になって、日焼け止めを塗り忘れた肌が黒くなったくらいだ。その髪も、帰国後何度も散髪した。肌も、東北の空の下、ずいぶん白くなった。自分は元のままだ。

だが、それだけではないのかもしれない。必要を感じて、先輩が始めた読書会を継続した。研究室にやってくる後輩たちと話をすることも多くなった。次に留学する時は、3年か4年か、あるいはそれ以上の長丁場になる。帰国する頃、今いる学生は誰もいないかもしれない。彼らのために何かできないのかと思う。そういう意味では、自分はずいぶん変わったと思う。

(修士2年 白石冬人)

インドのフランス語

インド・チェンナイからの報告 - 学会「フランス語（圏）空間：進歩する世界」に参加して -

先月、2013年1月17日から20日までの4日間、インド・チェンナイで開催されたフランス語圏研究の学会に参加してきました。成田からデリーまで約8時間、さらに飛行機でデリーから3時間、南インドに位置するチェンナイは、冬といえども連日30℃を超える暑さでした。さて、この国際学会はインド・フランス語教育学会の主催によるもので、今回が第7回大会にあたります（昨年（第6回大会）とインドのフランス語教育に関する報告を『フランス文学研究』第33号に書きましたので、あわせて読んでいただけたら幸いです）。学会全体のテーマとして掲げられたタイトル「Espaces français et francophones : le monde en marche」から察せられるように、発表者・参加者の研究分野は多岐にわたり、フランス語（圏）文学、翻訳の問題、言語政策・多言語主義、外国語としてのフランス語教育（FLE）などをめぐり活発な議論が繰り広げられました。ここで43の発表についてご紹介することは不可能ですが、たとえば、FLE関連では、大学におけるフランス語教育の意義・目的をどのように学生に、国に対してアピールするか？英語に次ぐ外国語としてのフランス語の位置をどのように確保していくか？減少傾向にあるフランス語学習者をどう維持し、増やしていくか？など、日本のフランス語教育が抱える問題とだいぶ重なるところがありました。

▼ 懇親会の風景



また、とくに印象に残っている発表は、ヨーロッパ諸国（フランス、ベルギー、ハンガリー、ルーマニア）、北アメリカ、アフリカ諸国（マダガスカル、南アフリカ、コートジボワール、ルワンダ、カメルーン、ケニア）における言語政策と経済発展との関係を歴史的に考察したもので、（良い意味で）いい加減な多言語主義が功を奏したモーリシャス、チュニジア、モロッコに対し、現在のアルジェリアやマダガスカルの停滞は実情から乖離した言語政策に起因すると指摘した上で、国が言語の多様性 *la diversité linguistique* を認めることは、その発展の要因でもあり結果でもあるというものでした。今後アフリカにおいてよりいっそうフランス語の需要が増すならば、当研究室出身のかたがフランス語力を生かしてアフリカに赴任なさることもありうる話で、現に活躍されている先輩もいらっしゃると思います。ぜひお話をうかがいたいです。

（助教 島貫葉子）

編集後記

今回、「フランス文学研究室 NEWS」の編集を担当させて頂いた、佐藤です。

編集と言っても、先生方や研究室の先輩・後輩そして同学年の友人たちに多くのお力をお借りしながらの仕事だったので、それほど大変なものではありませんでした。しかし、私としては小学生の頃に自宅で「家族新聞」を書いた時以来のことで、作成に当たっては悩んだところも多く、周囲の方々には本当にご迷惑をお掛けしました。

さて、本稿では学部2年生から助教まで、様々な立場の方が体験した興味深いエピソードを掲載しております。どの記事も各人の個性が滲み出ているようで、編集に当たった私自身も楽しく読むことができました。本稿は、OB・OGの方向けの新聞として企画されたものですが、読者を問わず、これらの記事を通して東北大学フランス文学研究室のことをより多くの方々を知って頂ければ良いな、と期待しております。

また、「フランス文学研究室 NEWS」継続・発展のために、ご意見・ご要望など頂けると、大変有り難いです。

最後になりますが、記事執筆に協力して下さった方々、編集にあたってアドバイスをしてくださった先生・先輩方、そして本稿を読んでくださった皆様に御礼申し上げます。

（学部4年 佐藤亮太）



▲ 学会開会式@SRM University

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

シラバス、留学記、就職活動記、講演会案内など多くの情報があります。

「フランス文学研究室 NEWS」に関する、ご意見・ご要望は以下のところまでお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

Email : shimanuk@sal.tohoku.ac.jp